「藤沢メダカ」を守ろう

裾野市内中学校

中野　さん

大型連休が始まる一週間前の日曜日。藤沢市議会議員選挙の投票に行く母と一緒に、私は市民センターを訪れた。母が投票ブースに入っている間、ロビーの掲示板を何気なく眺めていた私の目に、「藤沢メダカを守ろう」の文字が飛び込んできた。「藤沢メダカ？」「守る？」―私は毎年、湘南海岸での活動や清掃ボランティアに参加し、地元への関心度は高いつもりでいたが、またひとつ新たな地域情報を得て、好奇心が沸き立った。そして、地元の自然環境や生態系について調べ、理解を深めることにした。

私が住んでいる神奈川県藤沢市鵠沼（くげぬま）は、かつては境川が大きく曲がりながら流れ、“川袋（かわぶくろ）”と呼ばれていたそうだ。この地域は、水田と蓮池が共存し、春にはメダカ、夏にはヤゴ、秋にはトンボなどの湿地生物の宝庫だったという。中でもメダカは、私たち日本人にとって馴染み深い淡水魚であり、生息地特有の進化を遂げてきた。そのため、水系ごとに特徴的な遺伝子や形、色を持っていた。しかし、人口増加と共に宅地開発が行われ、水田や池は減少し、河川護岸はコンクリートで覆われ、鵠沼の蓮池の生態バランスは崩れていったのだ。ついに平成二年頃には、藤沢市内からメダカの姿は消え、環境庁によって絶滅危惧種として登録された。

ところが平成七年に、まるで秘宝が発見されたかのようなニュースが舞い込んできた。蓮池の環境が良好だった頃に採取されたメダカの子孫が、今や千匹にも増えて、近隣民家の庭池で生き延びていたのだ。ＤＮＡ鑑定の結果、このメダカたちは境川水系の純粋在来種であると判明し、「藤沢メダカ」と命名された。鵠沼の蓮池は、私の自宅から自転車で十分とかからない。こんな身近な場所で、これほど劇的な出来事が起きていたことに、私は衝撃を受けた。蓮池からの捕獲は偶然だったのか、それとも不安な将来を予測してのことだったのかは定かでないが、まさに“奇跡の再発見”と言えるだろう。

そして、この朗報直後、藤沢メダカ保護団体を中心として、江ノ島水族館や地元の小中学校、行政へと支援の輪が、またたく間に広がった。市民の団結力とスピード感あふれる行動力に、私は感動すら覚えた。現在は、教育文化センター指導のもと、約一四〇〇世帯の市民に藤沢メダカが配布され、飼育数も順調に増加している。しかし、難局を一つ乗り越えると、またさらなる難問が生じることを、私は知った。

保護団体の資料によれば、藤沢メダカを人の手で飼育し続けると、メダカの自然本能や特有の遺伝子が、やがては消失してしまうそうだ。そこで平成二十六年に、一一〇〇匹の藤沢メダカを約六〇年ぶりに故

郷の蓮池に放流し、野生化を促す試みがなされた。しかし、蓮池には天敵のザリガニが住み、他の地域から持ち込まれた別種のメダカとの交雑により、藤沢メダカのＤＮＡが失われるリスクも懸念された。放流後も、蓮池の調査が慎重に続けられている報告書を読み、私は保護団体の熱意を感じた。

久々に太陽が顔を出した連休の中日、私は蓮池へと自転車を走らせた。「藤沢メダカが安心して暮らせるように、他のメダカやカメなどを放流したり、むやみに捕獲しないでください。」と、蓮池の立て看板が注意を呼びかけていた。水面をのぞくと、黒みを帯びた藤沢メダカが、蓮の葉の間をスーイスイ、ツーイツイと、元気に泳ぎ回っていた。天敵にも負けず、自然環境に順応している様子は、私には逞しく見えた。その一方で、絶滅の危機に直面している状況を考えると、この小さな一匹一匹の存在が、とても貴重に映った。帰る途中で立ち寄った老舗ケーキ店では、藤沢メダカをモチーフにしたサブレが販売されており、地域ぐるみでの保護活動を実感した。

歴史をたどると鵠沼は、志賀直哉や芥川龍之介らの文人が執筆活動に没頭し、画家の岸田劉生が作品に描いた風光明媚な別荘地であった。その地で今、環境保全や自然保護を叫ばなければならないのは残念だ。自然治癒力に頼るのではなく、私たちは知恵と技術を結集して、失われた景観をよみがえらせる責任を果たすべきである。

来年、藤沢市は東京五輪のセーリング会場となる。現在、あちらこちらで整備が進み、藤沢駅周辺も様変わりしている。アピール性のある大きな変化の裏で、藤沢メダカを守るための地道な努力は続いている。今回、私は藤沢メダカについて学んだことで、ますます地元に愛着を感じるようになった。これからも、積極的に海岸清掃を続けていこう。川や池の小さな生物を思いやる心のゆとりを持とう。正しい生態系を守るため、水を汚さないという当然のマナーを実践しよう。一人一人の心がけが、必ず実を結ぶ。継続は力なり。